

史料室だより No.33

東洋英和女学院史料室委員会
発行 1989年 11月 6日

特集 短大「木造校舎時代」について

S.M. Juten

(インタビュー形式で短大のジュティーン教授に短大の「木造校舎時代」を中心にお話をうかがいました。)

▲宣教師として赴任された動機などからお話してください。

ある時期に、アメリカの福音教会のミッションが、日本に幼児教育者の養成校を持っていましたが、その養成校と東洋英和の師範科が合併しました。その合併した時点で、福音教会と東洋英和の師範科との間で、宣教師を派遣するという約束がありました。そこで福音教会のミッションの養成校の中心的働きをされていた、ドイツ人のキュックリヒ先生が、東洋英和に派遣されました。しかし彼女は埼玉県有加須で、養護施設の仕事をしていたので、週一回しか英和に来ることができませんでした。そこで、かわりに、私が日本に派遣されることになりました。日本のミッションから、幼児教育の先生が停年に近いから、どうかという話があって、ああ、これだ！と思って、日本に来ることに決めました。当時は若くて燃えていました。当時、日本はまだ復興していなくて、経済的に苦しい時代でした。

▲その時は、木造校舎でしたか？

私は、1953年から英和で講義をもっていました。その時は青楓寮で教えました。木造校舎の前です。青楓寮の一・二階に学生と先生が住み、三・四階で授業をしました。芝先生や藤岡先生たち(現短大教員)が学生として住んでいたことも

ありました。その寮は、当時としては高い建物で、そこから富士山や国会議事堂がよく見えたのです。

1953年の学生が青楓寮を校舎として使う最後の学年でした。最初、学生(保育科)は28名でした。それから、45名位の時もありましたが、学生と教師の人数が少ないせいもあって、親しい関係ができました。今でも当時の学生と交わりをもっています。木造校舎は、英文科の前身である英文専攻科がすでに使っていたようですが、1954年から保育科も木造校舎に移動して、本格的な木造校舎時代が始まりました。1959年に短期大学新校舎が落成して、6月に新しい校舎に移りましたので、いわゆる「木造校舎時代」というのは、この約5年間をさすと思います。木造校舎の由来はよくわかりませんが、米軍のバラック式の建物の払い下げであったようです。



(1954年当時の宣教師たちの写真
左から3人目がジュティーン先生、5人
目がハミルトン先生)

▲当時の授業について

私は、教育方法を教えました。最初の5年間は、専門の通訳を通して授業をしていました。短大では、当時大勢の宣教師が教えていましたが、みな専門の通訳をつけていました。多くの宣教師たちは、当時カナダ合同教会の宣教師館に住んでいました。

▲1954年3月に短大英文科の増設が認可されて4月に短大に木造新校舎が完成。いわゆる「木造校舎時代」は、短大英文科の草創期にあたるわけですが、英文科ができたことによって短大の雰囲気は変わりましたか？

短大の国際教養科ができて雰囲気が変わったのと全く同じことが当時起きました。短大全体が変わりました。そしてそれは結果的に大変良いことでした。狭い保育だけの短大から視野が広がったと思います。英文科の学生はどちらかというと派手だったので、ノースリーブの短大生が高等部の前を通ったりして、高等部から文句がきたりして、学院の話題になりました。

▲木造校舎時代からはずれるのですが、1960年代は、安保改定の激動の時代でしたが、その頃の学生の動きはどうでしたか？

この頃から、学生は目の見えない人々のためにリーディングサービスを始めました。日と場所を決めて、週一回本を読むというもので、地味だが良い活動であったと思います。人数は少なかったのですが、今よりも社会活動は盛んでした。この頃、団地の子供の保育を始めたりしています。学生YWCAが全国にあって、東洋英和も最初からメンバーでした。この学Yは、聖書研究のほかに社会にかかわろうとしたのですが、英和の学友会は、この学生YWCAから始まっています。

(1954年12月に短大友会が発足した。)

▲当時の教授会の様子はどんな風でしたか？

教授会はまだ組織されていなくて、常勤会の名

前で行なっていました。成績判定は教授会という名前で行なっていましたが、しっかりした組織ではありませんでした。人数が少なく、小回りがきいたために、会議がなくてもやってこれたと思います。英和は昔から会議が長かった。3時頃から始まって、終るのが6時か7時頃でした。当時、4時頃暖房が切れたので、会にはいつもジョールを持っていきました。木造校舎はとても寒くて、教員室のストーブでよく体を暖めてから教室へ行きました。教室は寒いので、学生もコートを着ていました。非常に寒かったという印象が残っています。それから、個人の研究室はなく、一つの部屋を共同で使用していました。

▲第一回目のかえで祭は木造時代に始まったのですか？

事務所の金庫が窓から入った泥棒に破られるという盗難事件があり、皆非常に困っていましたが、学生から文化祭をしよう、バザーでお金を集めようという話が出て、第一回目のかえで祭が始まりました。

▲カンファレンスについて

保育科は毎年秋に修学旅行を行なっていました。修養会を持ったのは英文科が初めてであったと思います。次の年から保育科も卒業前に修養会をしたらよいのではないかとということで、秋頃計画を立てました。会場は、五日市の青年の家とか安い所でした。窮屈だったのをよく覚えています。

▲当時の六本木は？

静かな町だった。大使館は最初から多かったが、都電が走り、今のような若者の町ではなかった。学校の青楓寮の近くに、パン屋さん、八百屋さんがあり、また中華そば屋さんがあった。当時タヌキうどんが30円だったと思います。

▲当時はキャンパスの中に、寮や宣教師館があるということで、どうでしたか？

良いまとまりがありました。しかしいやなことと同時にありました。

1970年の学園紛争の頃、不満を感じていた人々が、寮に帰って、皆そうだそだと不満を言い合っていました。寮は学園紛争の学生の中心のような感じでした。遅刻者の多いのも、寮の人達でした。寮の学生は多い時は、全体の三分の一にあたる70～80名位の時もありました。青楓寮の三・四階は使われていませんでしたが、三階に小さなチャペルがあり、そこで毎日、寮の人達は礼拝をしました。この寮の三階で、修養会をしたこともありました。卒業の頃、盛り上がってみんなでお話ししたいとドイツ人のキュックリヒ先生

を呼んで、特講の形で、修養会をしたこともありました。この青楓寮の土地が売られて、代わりに、横浜校地を買ったと思います。木造時代はよく暇があって、故岩佐先生たちを中心に、週一回カレーライスを作ってそれを高等部の先生や短大の学生に売ったりしました。何か学校を造るためのお金を集めるためだったと思います。何ヶ月か続いたと思います。

▲長時間、興味深いお話を聴くことができ大変ありがとうございました。

(文責 吉岡)

保育科 1958年卒業 市原 多喜子

昭和31年春、私は東洋英和女学院短期大学保育科に入学した。高等部のどっしりした建物の隣、道路沿いに植えられたヒマラヤ杉より、ずっと低い木造一階建の校舎だった。

入学してすぐ、保育科にとって大切な功労者であったミス・ハミルトンの送別会があったが、その頃の私達にとっては珍しい外国の先生が一人減らただけであった。

傾斜面に建った校舎は二棟に分かれ、右端の階段交りの廊下で繋がっていた。保育科は下の棟だった。村岡花子先生の授業では窓から見えるすずかけの裸木を指して「秘めた力があります」と言われ、長野静江先生はその木の下に敷きつめられた石を皆に一つずつ拾ってこさせ「この石一つにも美しさがあります。描いてごらんさい。」と言われた。

二棟の間はなだらかな芝生の傾斜になり、つつじが植えられ、日がさんさんとあたり、そこで私達は日なたぼっこをしたり、大中寅二先生の歌を次々とうたったりしていた。斜面の下には花壇があり、中沢和子先生の指導で生物部の人達がカイガラ草やカスミ草を植えて、当時としては珍しい

ドライフラワーを作っていた。

私達の入学した年の秋、最初のかえで祭が催された。短大に泥棒が入り、新校舎建設資金が盗まれたので文化祭で資金集めをしようというのである。もっとも大学側は卒業生のHomecoming Dayとして開催を許可したので、真偽の程は確かではないが……。とにかく私達は、はりきった。十番の商店街のすぐ裏側、今、マンションの建ち並ぶ所に金魚問屋があって広い庭に大きな水槽がいくつも並び、そこから分けてもらった金魚で金魚すくいをしたり、酒屋さんからコーラの瓶を貰ってきてボーリング場を作り、その券を売ったりした。

かえで祭当日はマーガレット・クレグ講堂では演劇も上演した。舞台装置を受け持った数名が六本木の金物屋に蝶番や釘を買いに行くと「俳優座の人ですか」と言われた。すっかり得意になって帰ってきて「女優と間違えられた！」と言うと皆が「なぜ女優が釘なんて買いに行くのよ！」とバカにした。

二年目のかえで祭では資金集めは姿を消し、真面目な研究発表等が行なわれた。大学側から要請

があって簡単な英和史と日常生活を写真入りでひと部屋に展示した。なんとなく寂しいので、かえで祭当日、高等部に行って校旗を借りてきて(短大には何もなかったの)飾った。自分達は満足したが、終って高等部から、当日あんな大事なものを借りに来るとは何事だと短大側にクレームがついて申し訳ないことをした。

礼拝は始めの頃は、高等部の校舎で行なわれていたが、途中から下の棟の横に建られたプレハブの建物で行なわれるようになった。普段はそこでリトミック等をし、礼拝とか、大中先生の音楽の時間にはイスを並べた。

クリスマスには、このプレハブに暗幕を張り巡らし、大講堂である気分で全校200名近い学生がキャンドル・サービスを行なった。低い天井

に若い学生の人いきれ、そしてキャンドルの炎…。酸欠状態になり、終わったとたん大急ぎで暗幕をはずし窓を開けたが、皆顔が真赤、フラフラしたものだ。

2年生合わせて100名に満たないせいか、寮生が多かったせいか、英文科、保育科の区別もあまりなく、礼拝の席も交じり合い、修学旅行も一緒に仲良く行なった。

木造平屋のあの入りやすい家庭的な校舎は、今思えば校舎というより園舎に近いあの建物は、そのままに私達の学生生活であった。家庭的で明るく、軽く楽しい生活であった。その校舎も2年後には取り壊され、高等部の運動部室として、しばらく校庭に建っていた。

保育科 1958年卒業 駒 米 裕 子

最近、偶々六本木交差点辺りを通ってみて、何処からともなく湧いて来る様な人込みの凄さに驚かされました。30年前、私達が通った六本木は都電が交差し、高速道路も高層ビルもない静かな佇の町でした。

さて、私が在学した昭和31年～33年当時の短大はそんな町の鳥居坂の一画にある木造平屋建ての校舎で、昭和61年3月までの元六本木短大の講堂部分に位置し、斜面を利用して、上の棟(英文科及び事務室、教員室、図書室等)と下の棟(保育科)を中庭を囲んでコの字形に階段廊下でつないだペンキ塗りの建物でした。別棟として礼拝や集会が出来る同じく木造平屋建ての講堂があり、3室位のピアノの個室もついていました。あとは中高の校舎の一部を授業によっては、使用していました。

創立百周年記念『東光』によれば、この木造校舎は、短大として既にあった保育科(昭和25年)

に昭和29年英文科が増設され、その時に建てられたとのことです。

入学当日、短大ともなればある程度立派な建物と思い描いていた私は、あまりにも、こじんまりとした建物に少々拍子抜けした記憶があります。しかし、実際に学生生活を始めてみると保育科一学年35名の中だけでも、南は沖縄、北は北海道と各地の出身者が集まり、三分の一ほどが寮生でした。学生数は、保育科全学年で70余名、英文科全学年で80余名といった規模でしたが、この少人数の学生に対し教授陣は専任の先生方の他、カナダ、アメリカの宣教師の先生方、各大学からの講師の先生方と大変恵まれ、それぞれの先生が個性豊かな講義をしてくださいました。私はあらためて英和の短大が大変伝統のある存在だと思われされました。それからの2年間は心のこもった教育環境で熱心な先生方に一人ひとりを大切に導いていただいた日々でした。私達学生も毎日朝から

ぎっしりの授業にも、さぼるとか遅刻をする等殆どなく、授業に飽きてくるとせいぜい内職をしたり、授業を脱線させる工夫をする位で真面目な生徒だったと自負して居ります。

各授業の数々の思い出もありますが、短大全体として、英文科保育科合同の学生会、その中のクラブ活動等があり、小規模ながらもそれぞれが何れかに参加して楽しい青春時代を送りました。学生会主催のかえで祭もこの頃から始まったと聞きます。

また、クラスで計画した遠足、修養会、修学旅行、音楽会、先生方の送別会、時には宣教師館へのおよばれの楽しい一時など行事を通してお互いの友情を深めていきました。

去年の夏の終りに、私達のクラスで卒業30年を祝って一泊クラス会を計画し、一年の時の担任のジュティーン先生を囲んで15名が集まり、筑波の森で楽しい2日間を過ごしました。大中先生の授業で習った歌を次から次へと歌い、フォーク

ダンスに興じて、中年とは思えないハッスル振りでした。その折、ジュティーン先生から、休暇で帰国される先生のために私達が開いた“ゆかたパーティー”（先生も学生もゆかた姿）の感激を今でも忘れないと伺い、30年前のクラス的一致協力振りを懐かしみ、夜の更けるのも忘れて語り合いました。そのクラス会に居合わせた外部の方より、卒業30年もたったのに練習もなしに次から次へと歌声が広がり素晴らしいハーモニーがかもし出されたのは、何年経っても、見えない心の繋がりがしっかりと結ばれているからでしょうと言われ、私達も本当にあの時代に良き師、良き友を得て共にキリスト教保育という一つの目的に向かって学び合った日々の事が何時までも皆の中に大切にされ育まれているのだとの思いを強くしました。子育ても一段落しこれからの人生をどう色づけするかが現在の私達の課題です。各々の場で精一杯はばたき、英和で学んだ精神を大切にこの輪を一層強くしていきたいと願っています。

英文科 1957年卒業 前田 美南子

“Small is beautiful”又は懐かしの木造校舎、駐留軍の置土産だった木造の校舎。白っぽいペンキで塗られいつもワックスの匂が漂っていた、校舎というより early American の一戸建といった風情の小さな平屋の建物 昭和二十九年短大英文科が発足して、三十四年に鉄筋コンクリートの新校舎が出来る迄の僅か五・六年間だけ存在した可愛い木造校舎が私達の学び舎でした。建物の横にはあれはヒマラヤ杉だったのでしょいか、それとも樅の木だったのでしょいか数本の常緑樹が植えられ、玄関のスイング・ドアを入ると突き当りの教員室からは先生方のお声が絶えずもれ聞こえ、ほゞ笑みいっぱい、又ある時はしかつめら

しいお顔の先生方に出迎えられ、学生達もある時はいそいそと、又身に覚えのある時は恐る恐る足音を忍ばせて出入りしたものでした。玄関左側の事務所ではいつも斉藤先生の穏やかな笑顔。台の上にはおそば屋さんの予約ノートが置いてあり、「タヌキうどん」等と書いておけば四時間目の終り頃になると「エー毎度」の声と共にブーンといい匂い。早く授業が終らないとノビチャウ——と気もそぞろになったものでした。教室の壁はベニヤ板で仕切られ、後方の席に坐っていると隣の教室の講義が筒抜けで、ノートがとれた等とウソの様な話が実話であり、廊下を隔てた音楽室で保育科の学生が歌う童謡に合わせて、英文学のノー

トにはシッポを生やした猿のお船やトマトを入れた麦わら帽子等のいたずら書きでいっぱいになるといった和やかな屋下りの授業が懐かしく思い出されます。走り厳禁のガタガタ音のひびく廊下。その左側の奥に静かな図書室。あんなに小さな室にぎっしり充実した本の数々。窓の外には芝生の斜面と小さな花壇があっていつもバラや小菊の花々が咲いていました。放課後の音楽室からはソシアル・ダンス・クラブの学生達が練習するカツカツ、サーッ、サーッという足音にまじって、テネシー・ワルツやアマポーラのレコードの音色が流れていました。

しかし、その一見のんびり、和やかな外側とは正反対に、授業そのものは大変厳しいものだったと思います。入学第一日目からの一言の日本語も許されない授業の数々にたゞ呆然とし、これからの二年間を思いやると果して卒業出来るだろうかと愕然としたものでした。一学年たった三十八名の私達は、すぐさま先生方から名前も顔も覚えられ、良きにつけ悪しきにつけ「〇〇さん」とお声がかゝるとなれば、うかうかなまけることも出来ませんでした。予習下調べをしっかりとしないでとはとてもついていけないような中身の濃い講義の連続で、なまじの四年制の大学より余程高度な授業だったように思います。四年間で学ぶ分を二年間に凝縮して教えて下さったのではないのでしょうか。先生方も学生達も新しい短期大学という制度に必死で手探りしつつぶつかっていたと思います。短大だからという甘えは許されず、むしろ短大だからこそこれだけの事をやれる、いえやらなければ、といった情熱にあふれていたのではないのでしょうか。

英文学が生涯、生活の中に生きていくようにと教え続けられた河村先生。会津先生。今も卒業生の為に米国文学を読む会に力を貸して下さっている

英文講読の飛田先生。優しい語り口でエバンジェリンの世界に、又古きイギリスの野に私達を誘って下さったミス・マッシュウソン。外国旅行等まだ夢だった時代に、パリの伊達と優雅の香りをふりまいて下さった桑島先生。パチパチと音の出るようなアカデミックな雰囲気を漂わせ、たゞみ込むように次々と問題提起をなさる丹羽先生。いつも学生一人一人を気にかけて、嬉しそうに、又心配気に私達の顔を覗き込むようにして話しかけて下さった松尾先生。どんな目立たない本でも、隅々迄心得て読書指導をして下さった図書室の主の芝原先生。それに加えて各大学からのもったいないような各講師の先生方。二学年、百名にも満たない私達一人一人に目を届かせ、引っぱって下さった先生方。それがどんなに濃密な毎日だったことか。個対個の教育が当たり前のように行なわれ、建物も教育も文字通り手作りだった贅沢な時代の恵まれた私達学生心の故郷。それがあの小さな白い木造校舎だったと思います。



（中高等部と右手前の木造校舎。
木造校舎跡地に元短大講堂が建てられ、
現在は中高等部の第二講堂として使用
されている。）

英文科 1959年卒業 大江 祐子

平成元年1月です。東洋英和女学院大学の学生募集広告を朝日新聞東京版で見たという義妹、そして東横線の社内広告で見たという娘の報告を聞いて、ついに4年制大学の時代がきたのだと少し複雑な気持ちになりました。

私達が短期大学英文科に入学したのは昭和32年(1957年)4月12日のことで、当時は六本木の木造建ての小さな校舎で、亡き長野弥先生が丹精こめて作られた、中庭の花壇に咲く美しいバラの花々に彩られての出発でした。クラスは一組55名のみで、担任は芝原翠先生、英文科科長は松尾芳子先生でした。東洋英和高等部からの進学者は29名、他高校から26名という構成でしたが、セーラー服を脱いだばかりのまだたつぷりと幼さを残しているような風情の乙女達が集合して撮った、入学記念写真が手元のアルバムの第一ページに貼ってあります。将来、誰が誰やら分からなくなると困ると思い、名前を余白に書いておきました。その中の二人が天に召されて、今では53名になってしまいました。昨秋(1988年11月)開いたクラス会では約半数が集い、芝原先生を囲んで楽しい和やかなひとときを過ごすことが出来ました。今までの道程はそれぞれに苦難もあったことでしょうが、集えばたちまち学生時代と変わらぬ昔のあの素朴な懐かしい雰囲気に戻ってしまう私達です。

英文科在学中の2年間に素晴らしい先生方から受けた大学生としての授業の他、武蔵小金井グリーンパークへの遠足、中高等部生と一緒に参加した運動会、御殿場東山荘での修養会、秋のかえで祭、クリスマス礼拝、イースター礼拝、カナダ人宣教師の先生方による宣教師館でのティーパーティー、東北への修学旅行、そして卒業礼拝、卒業



(短大木造校舎
右側が英文科。左側が保育科。)

式などなどが行なわれました。それらのほとんどは、保育科の学生と一緒にです。

保育科と英文科を合わせて学生総数が約2百人と少しというとても可愛い大学ですから、諸行事や、学友会の活動を通じて両科学生がさまざまな交流をもち、親しくふれあいながら、大いに楽しい学生生活を送れたことに感謝しています。特に、11月に行なっていたかえで祭は、その準備段階から終了するまでの数週間、本当に生き生きと忙しさに立ち向かっていたような気がします。

私個人としては、ESSに所属しておりましたので、1年の春には2年生の方達と一緒にICUで行なわれたESSの集いに参加して、ICUの学生達の堪能な英語にただただ感服して帰った記憶があります。1年のかえで祭では、ミス・サティアーが“Patchwork Quilt”という英語劇を演出して下さい、私は主人公のお婆さん役を仰せつかりました。その時は、中学部から白川・木村さんという二人の英語の上手な可愛い1年生を借りて、私の孫の役で出演してもらったりした

のです。髪をひつつめに結ったうえにタルカムパウダーをたっぷりのはいてつけ白髪のようにみせて、肩には黒いショールをかけ舞台に出ましたところ、見にきた母からあとで、もっときれいな役で出て欲しかったのよと嘆かれてしまいました、その時の写真をみると長い英語の台詞を一生懸命に覚えたのを思いだし、我ながら良くやったと懐かしさがこみ上げてきます。

2年生のかえで祭では、カナダ大使館へ行き、大使にメッセージを書いて下さるようお願いしたり、カナダ太平洋航空会社からカナダの風景を撮影した映画を拝借して映画会を行ったり、英語劇は、当時ミス・サティーンがカナダへ帰国されてお留守でしたので、British Council で見つけた女子のみで上演できる脚本を先生の助けなしで、上演しました。1, 2年生の部員全員の

熱意ですべてを分担して行ない、いろいろ苦労しましたが、なかなか充実した良い舞台が出来たように思います。

また、別の機会にESS主催で、当時封切られた映画「二都物語」の割引鑑賞会を東劇(?)で行なったり、カナダ留学を終えて帰国したばかりの高等部時代の先輩、月井美智子さんをお招きして、カナダでの留学生活のお話を聞く会なども催しました。

今、当時のことをあれこれ思い出してみますと、不十分なまま生意気にも、背伸びをしながらいろんなものに挑戦しようとしていたことに気がきます。つたないながら、一生懸命に模索しながら何かを表現しようと苦心していた私を思い出します。ちょっぴり照れながら申しませう。あれが、私達の青春だったのだと……。



(短期大学保育科・英文科教授会 1954年)

あ と が き

今年から四大が発足し、英和も新しい時代を迎えるに至りました。この際、短大についての歴史をまとめる作業の一つとして、今回は、1954年から1959年までの「木造校舎時代」にスポットをあててみました。ジュティーン先生からは、当時の模様を直接インタビュー形式で伺うことができました。また当時保育科と英文科の学生だった四人の卒業生の方に原稿を書いて頂くことができました。ありがとうございました。発行が遅れました不手際をお許しください。

(短大 木畑・吉岡)